

ジレムマに立つトマス・ウルフ

——*You Can't Go Home Again* にみる

George の Foxhall 宛の手紙を中心に——

古 平 隆

〔I〕

Thomas Wolfe を考える時には彼の作品の著者は彼なのか、彼と編集者なのかと言う懸念が誰にも一度は付纏う。その様に見え怪しげな作家の作品の一部を中心にして考えを纏める事に疑を抱くとしたら無理な事ではない。特に私の論文は、手紙の結びである十数行の一節を足場にして手紙の解釈を更に進めて行くだけに尚更である。と言うのは、この最後の一節は短篇 *I Have a Thing to Tell You* の終結部と殆ど同じ文であるために⁽¹⁾、極論すれば編集者 E.C.Aswell が独断で付加えたとも言えるからである。その際にはこの箇所を手掛りにして Wolfe の思想を探る私には一人相撲の危険があり、無意味にさえなってしまうのである。*The Thomas Wolfe Reader* を編集するに当り、L.H.Holman はこの箇所を手紙の Credo を二分し、前者を *You Can't Go Home Again* の抜萃に入れ、後者は新に Death の項を設けてその中に入れ、この本の結びにしている。しかし現在の私としては、Wolfe が達した思想を探るためには、完結している彼の最後の作品 *You Can't Go Home Again* は今あるままの作品で捕える以外には仕方のない事であった。この論文は Foxhall 宛の手紙はこの作品のまとめであると言う Wolfe の書簡をふまえ⁽²⁾、数十頁の George の手紙から数百頁の *You Can't Go Home Again* を隅み、更には数千頁の作品を残していった Wolfe に近ずこうとする試みである。

Thomas Wolfe は彼の一時代前の文学を築いた lost generation の作家達とは異り、もっとアメリカの未来を信じる積極性がある様に言われる。あれだけの広大な作品を書き上げた彼のエネルギーな態度は力強いものであり自ら lost generation の作家達の態度を厳しく批判する彼の言葉から察しても⁽³⁾、又本論〔II〕で取り上げる Foxhall 宛の手紙の内容からその傾向は一面正しい事は窺え様。しかし彼の作品には、例えばこの手紙が書かれている *You Can't Go Home Again* の如き表題には既に絶望が感じられる。一度家を出て家に帰れぬ家なき子に、それが運命の果てと知る人間に、明るい未来を想定出来るのか。この最後の作品ばかりではない。彼は初期からこの考えがうづついていた。⁽⁴⁾ 彼の如く南部から北部、アメリカよりヨーロッパと行脚し続け、

あげくの果てに再びまい戻る人間にはその事が一番良くわかると言うものである。その Wolfe にそして彼の母国アメリカには帰郷出来る家が有るのかないのか、これは問題である。

You Can't Go Home Again を考える際に貴重な資料がある。Wolfe が E.C. Aswell 宛に書くも投函せず、死後 M. Perkins と E. Nowell の手によって発見された書簡である。手紙が作品の解釈に役立つかどうかは一般論としては定説が立て難いとしても、今の場合には貴重であり、重要な鍵である事には間違いない。その書簡は彼が *You Can't Go Home Again* について書き記したものであり、書簡の文句と殆ど同じ文句が作品中の手紙に繰り返されている事実から⁽⁵⁾、この作品執筆時の彼の意識を探る事が可能であると思えるのである。E.C. Aswell が Book Seven につけてる序文で you can't go home again の意味について記した文が殆どそっくりこの書簡から採用されている事を思う時⁽⁶⁾、編者の彼は少なくとも重要視していた筈である。

その手紙によると、Wolfe は Wilhelm Meister's Apprenticeship の如き物語を書こうとしていた模様であり⁽⁷⁾、三度にわたり a book about discovery と記し、⁽⁸⁾ 以下の如き文が書れている。

It is a book, as I have said, about discovery—about discovery not in a sudden and explosive sense as when “some new planet breaks upon his ken,” but of discovery as through a process of finding out, as a man has to find out, through error and through trial, and through fantasy and illusion, through falsehood and his own damn foolishness, through being mistaken and wrong and an idiot and egotistical and aspiring and hopeful and believing and confused, and pretty much, I think, what every damned one of us is and goes through and finds out about and becomes. ⁽⁹⁾

人が人生を体験しながら考えを深めて行く成長の過程を物語る事、これがこの作品の主題の様である。

この観点から、I Young Icarus II Even Two Angels Not Enough III Ecclesiasticus IV Credo の四部からなる George の Foxhall 宛の手紙を考えてみよう。

{II}

I Young Icarus

かつては迷っていた (I was lost) George が Foxhall の助けて今は最早

迷ってはいない (now I no longer feel lost) と感じる迄に成長する問題提示が第一部の主題であり、詳しくは続く第二、第三、第四部によって追求される。

Foxhall に出会った頃の George は New York の Greenwich Village の仲間には反発していても、過度に洗練された審美主義に固まり、生活とは密着せず外界を敵対視し、あげくの果てには逃避に終る 気負った彼等の一人であった。当時の彼は未だ、父親の諫を無視して太陽に近すぎ、翼をつけた蠟を溶かして墜落した若きイカルスなのである。彼は社会一般の人々から切断され、根を切られた George であった。しかし Foxhall との交際のうちに、断ち切られた回路が回復するためには謙遜 (humility), 寛容 (tolerance), 人間理解 (human understanding) が必要であり、それなしには彼の目指すたぐい稀な育ち (rare breeding) に属せぬ事を学ぶ。そのお蔭で、今では若げの至で起した the Pine Rock case さえ自分と社会を結ぶ契機として眺められる程にまで成長するのである。かくして、社会と対立し自己にのみ専念していた彼は社会との調和を学び、自我脱却の犠牲 (selfless immolation) を厭わぬ境地に達し、最早道を失ってはいないと感じるまでになるのである。

II Even Two Angels Not Enough

George が幼い頃より求めていたものは、愛情と名声であった。愛情は Esther Jack により、名声は自己の作品により彼の年来の希望はかなえられたかに見えた。この二者を享有し我を忘れていた時にすら、しかし彼を満足させぬものがあつた。一度目的地に達しても直ちに次の場に駈りたてるものが、再び彼を追いたてるのであつた。自己の世界に没頭しきる彼を揺振るものは、世に埋もれ忘れ去られる虐げられる者と、一方強大な力で虐げる者の存在である。1929年の大恐慌の悪相が加わる。個人的自己中心の世界は震憾せざるを得なくなるのも必然的成行であろう。しかし彼はあくまで美しき Medusa, 愛情と名声を求めて酔いしれてはいた。

愛情の問題では Love Is Not Enough の章より補うと、Esther の特権の世界と彼の真理の世界とは並び立たぬ世界であつた。彼女は彼女の、彼は彼の世界の間人であり、二人は離れなければならなかつたのである。この章は次の如く結ばれる。

—And he must go.

They (Esther and George) said little more that night. In a few minutes he got up, and with a sick and tired heart he went away. (10)

名声の方はどうであつたろうか。彼の理想を体現してるとも見た Lloyd McHarg と彼は会う。McHarg 氏は当時のアメリカ文学界の大立物であり、今人気の絶頂にある作家であつた。(アメリカ人として始めてノーベル文学賞を受けた Sinclair Lewis をモデルとしている)ところが George が彼に見たものは何故か空しき勝利 (empty victory) だけだったのである。もちろん George の自我は強い。

Yes, I see how it is with Lloyd McHarg, but with me it will be different—because I am I. (11)

上の一文にその事は読める。彼はこの段階を経て selfless immolation にまで進むのである。

その後 George は最愛の国ドイツに行く。そこでは、ペルセポリスの凱旋門を勝利の歓呼のうちに通るチムールの如く、彼は有名人として5月の風薫るなか枳の木の花の下を歩む事となった。しかし彼の第二の祖國とも言うべきこのドイツに見たもの、それはヒットラーの指揮のもとに荒れ狂うナチのドイツである。彼は the Dark Age の再来をそこにみる。しかしドイツだけが病んでいるのではなかった。Brooklyn で見た家のない貧しい人々の褻れた顔が浮んでくる。アメリカにも同じ病が潜んでいたのである。しかし古い疲れきっているヨーロッパにくらべ、アメリカは若い。彼はここに希望があつた。アメリカは、真理に直面する事を恐れぬ限り未だ治療が可能なのである。この時代の社会の悪相に対して George は如何にたち向わなければならないか、ここまで成長した彼は、この点において父とも頼る Foxhall と別れなければならない宿命にあつた。

III Ecclesiasticus

George と Foxhall の二人は社会悪を見たばかりか、二人とも同じ名前をその現象に名づけた。二人ともその存在を心から呪つた。それなのに二人は和解出来なかつた。Foxhall はその現象を、汚れ痛めつけられる人間の心には固有のものであり、人間の呪であり、人間存在の根本的条件と見、避けられないものとする。この様な事象に向つて受容 (acceptance) の態度で臨む彼は変革出来る希望が持てないものにはあるがまさに秩序を受け入れる。もちろん彼は変革出来るものには出来るだけの努力は惜しまない。が、人力では如何ともなし難い運命には逆らわないのである。George の場合はどうか。彼は次の様に考える。

They (enemies) cannot be conquered by the sorrowful acquiescence of resigned fatality. They cannot be destroyed by the

philosophy of acceptance—...(12).

如何なる問題に対処するにも、彼は Foxhall の如く旧き敵が新しき敵にとつて代るとは考えず、昨日よりは今日、今日よりは明日の進歩を信じて日々の敵と闘い、この間断なき闘いにのみ人間の生ける信仰を読みとる。

ここに至って始めて敵に向う George の姿勢は確立したのである。もはや、迷ってはいないと感じる彼は、Foxhall との別れ即ち独立が可能となった。それではその敵とは如何なるものか、その敵とは如何なる熾烈な戦を展開する様になるのか、その時 selfless immolation とその敵との闘いとは如何なる関係にあるのであろうか。

IV Credo

この第四部の後半の出だして George は次の様に書き始める。

I believe that we are lost here in America, but I believe we shall be found. (13)

この未来に寄せる信頼は更に次の節では畳み掛けて繰り返えされる。

I think the true discovery of America is before us. I think the true fulfillment of our spirit, of our people, of our mighty and immortal land, is yet to come. I think the true discovery of our own democracy is still before us. And I think that all these things are certain as the morning, as inevitable as noon. I think I speak for most men living when I say that our America is Here, is Now, and beckons on before us, and that this glorious assurance is not only our living hope, but our dream to be accomplished. (14)

一方破壊をもたらす敵は時の始まりと共に存在し、悪魔の如くしたたかな敵故巧妙にも味方の振りをして、敵対する者にはこう言う。

...Behold," cries Enemy, "the man I am, the man I have become, the thing I have accomplished—and reflect. Will you destroy this thing? I assure you that it is the most precious thing you have. It is yourselves, the projection of each of you, the triumph of your individual lives, the thing that is rooted in your blood, and native to your stock, and inherent in the traditions of America. It is the thing that all of you may hope to be," says Enemy, "for ——" humbly —— "am I not just one of you? Am I not just your brother and your son? Am I not the

living image of what each of you may hope to be, would wish to be, would desire for his own son? Would you destroy this glorious incarnation of your own heroic self? If you do, then," says Enemy, "you destroy yourselves — you kill the thing that is most gloriously American, and in so killing, kill yourselves."
(15)

それにすかさず He lies! と応える George。彼は敵のカモフラージュに惑わされず、敵の姿を見抜くと共に真正面から抵抗し、Foxhall とは異なる生き方を示めすに違いない。かくして手紙は最後の一節に入る。

Dear Fox, old firend, thus we have come to the end of the road that we were to go together. My tale is finished — and so farewell (16)

別れ際に George は一言つけ加える。

But before I go, I have just one more thing to tell you :
Something has spoken to me in the night, burning the tapers of the waning year; something has spoken in the night, and told me I shall die, I know not where. (17)

さてある物とは一体何物なのであろうか。敵かそれとも不吉な予感か。あるいは別のものか。I shall die とは何を意味するのであろうか。自己を犠牲にして同胞の救済を願う George には死だけがあるのか。その意味にとれば selfless immolation の境地に立つまで発見し続けた George は Wolfe の書簡が言う a book about discovery の主人公の姿と言えよう。Aswell あての書簡では

But the conclusion is not sad: this is a hopeful book — the conclusion is that although you can't go home again, the home of every one of us is in the future: there is no otherway. (18)

と Wolfe は記している。George の如く敵の策略を見抜き、自己の生き方を確立した人間にとってはまさに希望のある本であり、文字通りに受け取れもする。

問題なのは (17) の引用文には自己の理想を実現し、至福の喜びに没る響がない事である。その様に感じ、考える者にはこの Credo に表現されているアメリカに寄せる前記 (14) の引用文の信念は自らの胸に潜む疑惑を陰す実体のない上擦った言葉とはとれないだろうか。引用文 (18) Aswell あての書簡の

後半の断定は確信して吐いている言葉であらうか。引用文(15)の敵の声は即座に打ち消す George の考えよりは真実に溢れている。Foxhall に向っては now I no longer feel lost と言い切る彼が、Credo において、I believe that we are lost here in America と言う時、仮令その後に but I believe we shall be found が続いて来ても⁽¹⁹⁾、個人の George とアメリカ全体を考える George との間にはどこか違いがある様に思える。

こう思いあたってみると、I shall die には別の意味が浮び上って来るのである。Wolfe の書簡のお蔭で、George の手紙と *You Can't Go Home Again* の意識的意図は探り得ても、未だ何かが——無意識的意図とまで言わないとしても——解決されずに残っているのである。今までは Foxhall あての手紙を表面的に解釈して来たが、“I shall die”の解釈を掴むためにも、もう一度考え直してみよう。

(III)

I Young Icarus は問題提示の部と考えるとⅡ部以下が問題であらう。

II Even Two Angels Not Enough において彼の渴望していた愛情と名声との Medusa を拒否した事は何を意味するのであろうか。この場合、愛情と名声とはあくまで自己中心的な世界に属している事に注目しなければならない。幼い頃より熱望していたこれら兩者の否定は、自らの過去の否定とこれからの方向を示めさないだろうか。今まで自分の成長に最大の力となっていたものが Foxhall である事を思えば、Foxhall の否定即ち Foxhall との別離へ当然論は進まなければならない。III Ecclesiastics の主題である。

Wolfe は自伝的作家であると言われる。特に彼の場合はその要素は濃い。今その穿鑿は他の研究に譲るとして、彼自ら真剣な小説は自伝的でなければならないと言った。⁽²⁰⁾ その彼がこの論文中しばしば利用してる例の書簡の中で、この主人公 George ほど自伝的主人公はなかったと言っている。⁽²¹⁾ この事を思いおこす時に、Foxhall と George との二人は悪に向う抵抗手段が異るとは言え、二人は Wolfe の表裏をなす人ではないかと思えるのである。Wolfe はこの二人を同じ極でありながら全地球を間に挟む南極と北極の例で説明しているが⁽²²⁾、私は理想と現実で解釈している。Foxhall は Wolfe の現実の人であり、George は理想の人なのである。これは Wolfe が如何に Ecclesiastes を愛読していたかと言う事実からも推察されよう。⁽²³⁾ Foxhall を拒否する George は彼の理想からやむにやまれずに生れた Wolfe なのである。この様に強い使命感は Wolfe の作品中、決定的瞬間には随所に現れる。⁽²⁴⁾ これが今の George に全く当嵌る。

青春の対象、愛情と名声から離れ、今では友・親・精神的守神である Foxhall とも彼は訣別した。彼の否定する対象は一步一步身近に追ってくる。この過程

は一步一步自己否定に向う道ではないだろうか。Foxhall さえ退けた George の刃は今残るただ一人の相手、彼自身にあてられているのである。Credo で述べられる主題である。

IV の Credo において George に叫んだ敵 (Enemy) の言葉で (参証: 注の 15) はもう一度読み返す価値がある。敵が「私を殺す事はお前を殺す事である」(25) と言うのに応えて、George は He lies! と思う。はたしてそうなのであろうか。

友人が敵の姿で現れる事は Wolfe の好むイメージであり、*Of Time and the River* の Eugene と Starwick との関係がそうであった。

The enemy had come behind the mask of friendship.(26)
と気づいた Eugene が Starwick と取交す会話は下記の如くである。

And for the first time I realized that you were the first and only person of my own age that I could call my friend. You were my one true friend — the one I always turned to, believed in with unquestioning devotion. You were the only real friend that I ever had. Now something else has happened. You have taken from me something that I wanted, you have taken it without knowing that you took it, and it will always be like this. You were my brother and my friend —”

“And now?” said Starwick quietly.

“You are my mortal enemy. Good-bye.” (27)

今の George の場合もこの繰り返しなのであろうか。彼は現在の敵を友人の姿を貸りる敵と考え、He lies! と考えたのであろうか。自らの精神的父とも頼む Foxhall との絶交を生む程ギリギリの線にまで追いつめられている George には、敵が友人の姿で現われる様な悠長な闘いでは決してないはずである。彼は既に Foxhall に敵の姿を見抜いたからこそ訣別したのである。友人の内に敵がいたのである。友人こそ今となっては敵だったのである。Eugene にとっての Starwick・Weber にとっての Foxhall は成長して行く主人公にとって外部の昔の友が、今、敵に変貌したにすぎない。しかし今、敵と問答している George の場合はそうではない。かつての敵は友人の中に彼にとって外在していたにすぎない。しかし現在の敵は自己の中に内在しているのである。彼は自我こそ自らの敵と発見したのである。外在する対象を否定しつつ成長し続けて来た彼は、今、内在する対象を否定しなければならなかった。自分にあれほどの熱情をこめて書きまくった彼が、最後に自我に敵を発見しなけれ

ばならなかったとは何と皮肉な事であろうか。この敵を殺す事が当然に自己の死を招く事は必然的成行きであった。敵の声と思えたもの、実は自我の声だったのである。それだからこそ George が 考える次の言葉

He lies! And now we know he lies! He is not gloriously, or in any other way, ourselves. He is not our friend, our son, our brother. And he is not American! (28)

はかえって逆にしてみた方が George の真意が明らかに表現される。

He does not lie! And now we know he does not lie! He is gloriously, or in a way, ourselves. He is our friend, our son, our brother. And he is American!

夜、彼に囁く something の声は理想の自我が現実の自我に囁く声であり、そこには George の予感どころか実感がこもり、それだけに I shall die, I know not where 以下最後の一語に至るまでの最後の一節は宗教的挽歌の響きであるのである。(29)

ここに至って始めて George の selfless immolation は完成し、キリストが無実の身でありながら人の罪を救うために自ら十字架にかかるのにくらべ彼は罪のある我が身を十字架にかけける事によって救済に向う。Wolfe の書簡集には次の如き文があるが

...man who kills himself is almost always the man who loves life well ... the lover of life who wastes himself, who loves life so dearly that he will not hoard it, whose belief in life is so great that he will not save his own: I mean Christ ... (30)

Wolfe は George に現代のキリスト的イメージを重ねなかったであろうか。

この様にして彼は now I no longer feel lost の悟に達し、彼の発見を為し遂げる訳である。かくして彼個人の問題は解決し得た彼だが、その彼も I believe that we are lost here in America と言わなければならなかった。今や論文の結論に近ずいて来た様である。

[IV]

George は愛情と名声に酔いしれる真只中にある時、社会の悪相が彼の心を苛んだ。そのために自己中心的な subjective な世界から社会全体の objective

な世界に彼の目は向けられた。それは特にドイツにおいて頂点に達する。彼に接する人々が自由に見えながら、お互い同志の非人間的よそよそしさに気づいた彼は、背後に潜むナチズムの本体を見通したのである。彼等の行動はナチズムの顕在したものにはすぎなかった。この体験を通し彼の社会意識が、golden city⁽³¹⁾として憧れた都市生活に絶望した昔の彼を呼び起した。再び病めるアメリカが全体として彼の心を捕えた。ナチズムや彼の接した社会の悪相は彼の成長にとって極めて大切な刺激にはなっている。が、彼は作家らしく、社会現象にのみ社会悪の根本原因を見た訳ではなかった。Wolfe は当時の Franklin Roosevelt の政体が Woodrow Wilson 以来の政体であるとして、あの大恐慌の際にも信頼を寄せているのである。⁽³²⁾やはり Wolfe にとって最も関心があった事は、社会悪の根本を社会体制に見る事ではなく、George が次の如く言う様に

I think the enemy is old as Time, and evil as Hell, and that he has been here with us from the beginning. ⁽³³⁾

人間の誕生以来人間にとって切り離せない必然的存在と考える事だったと思う。社会現象として目に写る現実の社会悪はこの必然的存在が顕在せしめたものであり、顕在する悪は潜在する悪の一現象にすぎないのである。George が自己の内部に最後の敵、自己とは切断不能の自我を見つけた如く、アメリカ全体の敵はやはりアメリカの存在そのものと切り離せぬ関係にあるのである。George は個人的には selfless immolation に自己の完成をなし遂げる方向を確立出来たが、現実的にアメリカはその姿勢をとれるかどうか。個人救済の道がそのまま国家全体を救う道でなかった所に George のジレムマはあった。George 個人としては帰るべき道——それは進むべき道であるが——を発見した。しかし George の属すアメリカの帰るべき道は見出せなかった。now I no longer feel lost と言いながらも、I believe that we are lost here in America と言う彼のジレムマは最後まで彼に纏はりついていた。そしてこれがまた Wolfe のジレムマであったのである。

(Nov. 5. 1963)

註

- (1) I have a thing to tell you:

Something has spoken to me in the night, burning the tapers of the waning year; something has spoken in the night; and told me I shall die, I know not where. Losing the earth we know for greater knowing, losing the life we have for greater life, and leaving friends we loved for greater loving, men find a land more kind than home, more large than earth.

Whereon the pillars of this earth are founded, toward which the spirits of the nations draw, toward which the conscience of the world is tending — a wind is rising, and the rivers flow.

C. H. Holman 編 *The Short Novels of Thomas Wolfe*, Charles Scribner's Sons, New York p. 278.

But before I go, I have just one more thing to tell you:

Something has spoken to me in the night, and told me I shall die, I know not where. Saying:

"To lose the earth you know, for greater knowing; to lose the life you have, for greater life; to leave the friends you loved, for greater loving; to find a land more kind than home, more large than earth——

—— Whereon the pillars of this earth are founded, toward which the conscience of the world is tending — a wind is rising, and the rivers flow."

You Can't Go Home Again, Dell, New York, pp. 670 – 71.

- (2) For months now, it has occurred to me that I would conclude the tremendously long book on which I am working with a kind of epilogue that takes the form of personal address — to be called, "You Can't Go Home Again" or "A Farewell to the Fox," or perhaps by still another title. That epilogue as I have conceived it, would be a kind of impassioned summing up of the whole book, ...

E. Nowell 編, *The Letters of Thomas Wolfe*, Charles Scribner's Sons, p. 751.

- (3) *The Story of a Novel*, Charles Scribner's Sons, New York, pp. 28 – 30. 少し長すぎるので引用はさし控えるが、参照されたし。なお *You Can't Go Home Again*, Op. cit., p. 646. には以下の文がある。

I do not feel that I belong to a Lost Generation, and I have never felt so. Indeed, I doubt very much the existence of a Lost Generation, except insofar as every generation, groping, must be lost.

- (4) *Look Homeward, Angel* の最後の章ではこれから町を出て行く Eugene Gant に兄 Ben の亡霊はその事に触れ、二人の間に次の会話がある。

"When are you coming back, 'Gene?" said Ben.

"Why — at the end of the year, I think," Eugene answered.

"No," said Ben, "you're not,"

"What do you mean, Ben?" Eugene said, troubled.

"You're not coming back, 'Gene," said Ben softly. "Do you know that?"

Landsbough, London, pp. 442 – 3.

The Web and the Rock の最後の文は "But—you can't go home again" で結ばれている。

Dell, New York, p. 736

短篇集 *The Hills Beyond* の *The Return of the Prodigal* では Eugene Gant は故郷で奇妙なお迎えを受けた揚句、そこでも又、兄 Ben の声を聞く。"Brother! Brother! ... What did you come home for? ... You know now that you can't go home again!" Pyramid Books, New York, p. 102.

You Can't Go Home Again の始めでも帰郷する途中の車中で George は Judge

Bland に次の如く云われる。

"And do you think you can go home again ?

"I mean, do you think you can really go *home* again ? "

"Now answer me! Do you think you can ? "

Op. cit., p. 93.

- (5) Wolfe の書簡では the sensitive young fellow in love, and so concerned with his little universe of love that he thinks it is the whole universe Op. cit., p.713 とある語句が George の手紙では the sensitive young fellow in love, and so concerned with his little Universe of Love that he thought it the whole universe Op. cit. p. 654. となっているだけ。又、前者の中では "some new planet breaks upon his ken" Op. cit., p. 711. の文が後者の中では John Keats に一言触れた後, a new planet swims into his ken と書かれている。Op. cit., p. 654.

- (6) E. Nowell 編, *The Letters of Thomas Wolfe*, Op. cit., pp. 711 - 12. の言葉は

...You Can't Go Home Again — which means back home to one's family, back home to one's childhood, back home to the father one has lost, back home to romantic love, to a young man's dreams of glory and of fame, back home to exile, to escape to "Europe" and some foreign land, back home to lyricism, singing just for singing's sake, back home to aestheticism, to one's youthful ideas of the "artist, and the all-sufficiency of "art and beauty and love," back home to the ivory tower, back home to places in the country, the cottage in Bermuda away from all the strife and conflict of the world, back home to the father one is looking for — to someone who can help one, save one, ease the burden for one, back home to the old forms and systems of things that once seemed everlasting, but that are changing all the time — back home to the escapes of Time and Memory.

人称の変化とその他の 僅かの変化を除き、そっくりそのまま *You Can't Go Home Again* の637頁に載せられている。

尚 Aswell の A Note on Thomas Wolfe (*The Hills Beyond*, *The Sun Dial Press*, New york. p.375) はこの間の事情に触れている。

- (7) It is about one man's discovery of life and of the world, and in this sense it is a book of apprenticeship. As I told you before, I had in mind the doing of a kind of American "Gulliver's Travels." ... I now think that the illustration that comes closer to the kind of book I want to do is "Wilhelm Meister's Apprenticeship" rather than "Gulliver."

Ibid., p. 711.

- (8) Ibid., pp. 711-12.

- (9) Ibid., p. 711.

- (10) *You Can't Go Home Again*, Op. cit., p. 299.

- (11) Ibid., p. 656.

- (12) Ibid., p. 666.

- (13) Ibid., p. 669.

- (14) Ibid., p. 669.

- (15) Ibid., p. 670.

(16) Ibid., p. 670.

(17) Ibid., p. 670.

(18) E. Nowell 編, *The Letters of Thomas Wolfe*, Op. cit., p. 712.

(19) *You Can't Go Home Again*, Op. cit., p. 669.

(20) *The Story of a Novel*, Op. cit., p. 20.

...any serious work of creation is of necessity autobiographical...

(21) *The Letters of Thomas Wolfe*, Op. cit., p. 713. には次の個所がある。The protagonist, the central character, the Wilhelm Meister kind of figure — really the most autobiographical character I have ever written because I want to put everything I have or know into him ...

(22) *The Letters of Thomas Wolfe*, Ibid., p. 579 M. E. Perkins 宛の手紙には次の個所があり、その次の引用文は *You Can't Go Home Again*, Op. cit., p. 663. より取ったものである。ここにも Wolfe の自伝性を窺えよう。

Just as in some hard, strange way there is between us probably this fundamentally complete agreement which you speak of, so too, in other hard, strange ways there is this complete and polar difference. It must be so with the South pole and the North pole. I believe that in the end they too must be in fundamentally complete agreement — but the whole earth lies between them.

And that is the strange hard thing, and wonderful and mysterious; for, in a way the little clacking tongues can never know about, it is completely true. Still, there is our strange paradox: it seems to me that in the orbit of our world you are the North Pole, I the South — so much in balance, in agreement — and yet, dear Fox, the whole world lies between.

(23) *The Letters of Thomas Wolfe*, Op. cit., pp. 255-6. A. S. Frere — Reeves 宛の書簡から取る。

In "Ecclesiastes," in "Job," and in "the Song of Solomon," I have this summer found magnificently expressed what I have myself been almost thirty years in finding: I not only have nothing to add to what I found there, I even fall far short of the wisdom in those poems, and I fall infinitely short of their beauty and talent.

(24) *Of Time and the River* で Pierce 家を訪問する Eugene Gant が上流社会の悪と作家生活の真とは両立せず、去らねばならないと悟った時、

It was too hard, too painful, too much to be endured, he could not go! — ... — he heard the great train thunder on the rails — and he knew that he *must* go! p. 596.

去る事は出来難いが去らねばならぬと思う彼の使命感。 *You Can't Go Home Again* の21章 Love Is Not Enough で Esther と別れねばならぬと悟った George のそれ。註10を参照されたし。

(25) 原文では敵対全アメリカ人の関係になっているが、アメリカ人全体を背にして George が敵とあい対しているだけに、この関係は又、敵対彼との関係でもある。

(26) *Of Time and the River*, Op. cit., p. 764.

(27) Ibid., p. 783.

- (22) *You Can't Go Home Again*, Op. cit., p. 670.
- (23) Richard Chase は...the last half of the book is in fact a dirge for Thomas Wolfe...と序文で書いている。Ibid., p. 20
- (24) *The Letters of Thomas Wolfe*, op. cit. pp. 255-6.
- (25) *Of Time and the City*, Op. cit., pp. 507-8. 長すぎるから引用は避けるが、僅かの二節に golden の語が幾度繰り返されている事か。
- (26) *The Letters of Thomas Wolfe*, Op. cit., p. 553.
- ... this present administration, (the administration of Franklin Roosevelt) whatever its errors of commission or omission may have been, has made the only decisive movement that has been made in the direction of social progress and social justice since the administrations of Woodrow Wilson.
- (27) *You Can't Go Home Again*, Op. cit., p. 669.

Résumé Takashi Kodaira

Thomas Wolfe in a Dilemma (On George's letter to Fox)

When George met Fox, he was a young "Icarus" and "lost." He won love and fame he had aspired for in youth, but he realized they were not enough for him. He could not be satisfied with his own little life and felt an intense concern for his fellow men's world. He experienced the cataclysm of 1929 in Brooklyn and later he saw the Dark Ages come again in Germany. He could not agree with Fox: his friend, his parent, and his guardian. Their philosophies of social evils are different. In this way he had to depart from Fox, but he no longer felt lost. He will fight the enemy with the selfless immolation.

How shall we interpret this subject matter of George's letter to Fox? According to Wolfe's letter, *You Can't Go Home Again* is a book of apprenticeship and of discovery. What does George gradually discover? I think the process of George's discovery is that of self-negation. When he left the world of fame and love that he had longed for, he made up his mind to deny his subjective life. It is natural that he should depart from Fox, for Fox has the most important relation with his subjective life. He could not live an objective life without severing the relation with Fox. He could not "feel no longer lost" until he

became independent of Fox. In this way he denies love, fame and his guardian of his spirit. They, however, are the external enemy. He had to face his internal enemy, that is, his ego. It is the enemy latent in him. Fame, love and Fox were only its actualized phenomena. At last he discovered his mortal enemy, but to destroy this enemy means to destroy himself. This is the reason why he knew the need of selfless im-molation and he felt no longer lost.

We must notice that his objective world blotted out the self-centered world. As the cataclysm of 1929 and Nazism shocked him out of his subjective absorption, they are important elements for his spiritual development. But they are not the mortal enemy. They are only actualized by the mortal enemy latent in America and Germany.

His primary concern is about America. As he destroys his ego, so America must kill her ego, in order to "go home again." It is true that he could do so in the case of himself, but is it possible that America can do so? George must say, "I believe that we are lost here in America," though he adds, "but I believe we shall be found." They will continue to be lost in America, because America can not make use of the credo George formulated.

Thomas Wolfe is in a dilemma.